HOKKAIDO UNIVERSITY



| | |
|---|---|
| Title | 朝鮮年中行事調査 |
| Author(s) | 鈴木, 栄太郎 |
| Description | 昭和 19年 5月、ノート、 39頁。 |
| Issue Date | 1944-05 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/77333 |
| Type | manuscript |
| File Information | D007_01195.pdf |



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

NOTE BOOK

昭和十九年五月

# 朝鮮年中行事調査

咸鏡北道明川郡
平安南道順川郡

文運堂製

明川郡下雲面明川洞

一月

作業は野良で働くことは少いが、肥料の運搬をやる。之は
十二月下旬より二月まで。其他の作業は休んで居る。
二月十五日迄掛から二月末までで大体肥料運搬の一番多い
いつか堆肥を家から畑まで運ぶ事。一日十五〆位（牛車で運べて）。
又一家内の薪の運搬をする。（十二月上旬より一月末まで）
堆肥の草は毎年五月より（八月までにかつて）その山から。
二月の堆肥運搬はクルマ（四）に入れて牛で積む。
一回に七〆から十〆まで運べる。
薪は冬の七月（八月）山に行って伐り山に置いてある。
二月に山から取ってくる。平均一戸三石五十束位。
五百束しているところ（大家族の家）
自家の山あれば其の山で、他人の山のは何人かで
共同して買って伐る。（山主で一定以上のところもよく
ある）平均一町。牛で運ぶ。一日で十二束半位。
旧二月中は雪が大分降ってある。
様に毎日二十五束。
以上十二月始めから正月末（迄）

肥料運搬は二月末乃至三月に始める。
其を要する仕事では家の。永って居る。向んせらな
けは水かきをけてからはとても遠へぬ。
薪運搬肥料運搬は牛車男か女か男の子
等、

正月元日と大晦日の二日は休む。十四日五日休
十四日の夕方で一年の仕事を終わっておる。今年でやる
事は十四日の晩食んはあ、やる。献物を(十二)
並べ。その次の日かたまりを十二個並べる。翌三日の朝
その次の日の色を見て定める。灰色の所今はねでら
其は雨、雨才の日は年に。山灰の色合を見る。
大抵の事である。これを照占と云ふ。
秋節をのむ大阪は秋の繁を行ふ。それを飲福として
食ふ。部落としては何もない。

十五日前の吉日を卜して斎戒を行ふ。それは
山中の祀り。祭りの夕が斎戒。翌年の祈り
病疾除いである。山神は部落毎にある。
山神は斎戒の場所は牛馬が入らない山。牛馬
が入らない位奥深く清浄な山の所。神位は
何もない。
祝文をよむ。大体は左様い、
祭官は別になく、各戸から一人一人行く。祝文
をよむ。
部落の長老なかったのですが代表の祝文をよむ。
その人は自然にきまり其の為の潔斎がない。
祭物は豚と牛。ナマと煮たもの両方。四十斤な
いし四十五斤ぐらいで献ずる。飯を供へる。今は豚。
酒も。
翌日前に部落の人が集まり集会する。
各戸飯と豚一切づつ、持って行って飲むこともある。

祝文

読識の時読は朝で寺が一般に区長位にする。
祭物の準備する人は部落の有司がやる。
祝文は二種ある。各戸主人のよむものと代理のよむもの。
代表祝文を読む人は当日内で世す葬式の家へ
行かぬ。祭物の準備する人も然り。祭物の用意する
人は二名ある。任期一年としてきめる。尊位、公員
とそれを云ふ。この二人は祭の事をやるのでなく一般
部落の公事をやる。区長の外何んでもする。
尊位公員の選定は互選するか、前任者が指名す
るのが例。尊位は任年とつくが公員は毎年か
はる。尊位は部落内の一番の人格者で高齢者
公員は若い、よく働く人。今の区長は何時的で
あるが、部落の仕事は自分から進んでする。
部落の慶弔の時の代表、不良者の訓戒、他部落
との交渉。尊位は必ずしも祝文を読むとは限らぬ。
公員は祭物の準備をやる。尊位は必ずしも儀式
で出来ぬ
各戸で読む祝文は代理のと大体同じ。代理のは部落
各戸主名を連名する。
代表のは豊年と病厄殺いが内容となっているか、
個人の場合は今さしあたり祈りたい事。
前(村)の祈願は両方位で行る。
祝識の場所は半島の入りぬところを選んである。
人は山の山んでもよい。祝識の場所は人は
行かぬ。木は切らぬ。古木はある。其の下位の所。
祭壇は平たいしてある。古木は標準するまで
年を年より云ふのには古来である。

(1)

歳暮は一月と七月
七月を一盆歳暮と云ふ。
一月は年始からする。

その神聖な気囲は神域として はなはだ牛島はの
けがる女入れぬのである。
その時行って その場で公宮に餅福を各戸へ人がやるか
定いから、公宮が向って返し そこから各戸へ分け
てやり、各戸で餅福する。
祭ん行く仕事の正月の

公宮の選挙は試験のあと その日に前の公宮をやめ
きめる。公宮の定めが事まる。公宮は中流以上の家を
善信がえんする家全体なし 他人は 善信は高年である
から家族の公宮をやる。

十二月末日は飯食物の準備して食ふ丈、祭ん行くことは
ない。

十四日夜は米各宅んおをつけて祭らない。お供も寝
ぬ。眠ればまゆが白くなる。魔よけのためである。
(これは字城では十二月十日。ここではひ日十日の宿
大依す事等がやって来たが、今はやって来へ。やって
来る人します。
十二月末日は事業はこれは旧暦ねはやったが今
はやらぬ。年上名んぼして新年をよく迎へ
るねんぼうする。食物などをせぬ。

除夜の行事、その夜は七日かんする家から祝詞を

マダ
系識 トダユの
クワフ
サンブリ
サルブリ

やる。飯ん行すはたこ。

元旦はは何しなら口地土を合わ丈。新歳ねはある
かやはすえれた。美俗であってあたらしゆうすゝる。
十二月末日の深夜即ち元旦に祀がある。
夜一時頃各戸でやる。乃宗は宗家宗家ん写すする。
乃宗に対して大本宗のすを文家宗と云ふ、大文
家宗宗家宗家
本宗は隣部落へあってと行く。夜中早く行くか
遅くん行く。年老の古今宗のもまか行く。分家
いなる。其祀は宗家である。正月は即地主か
まず元気でいて祀先を祀る。
正朝茶祀は不吉な宗は白餅の汁（トククッ（汁））であ
る。

廻祀

若年であったなら仕事無くなった。る家元
近は西縁があった。同族丈ではない。（無縁）若志
部落外の者が同信者。（部落内）若志
常に年中男子に対して年中男子。宗家内では男、宗
家内では女。男は宗家内に祀をする丈。
その日の接待の方事は過歳を安寧んすまし
まして加之と云ふ。

サンブリは元旦――十五日までやんなし。

以前はにやよから正月と呼ばれなかった。
在来の人は正月をは知らぬ。
近来は無し。

立春のは
外ん何もせず。二十年も前には名句を門に書いた。
郷党の名筆に書いてもらって貼った。
十五日ん年じんじをやる。宗の字(運)、他人の立の
「年の運をやる。今も二三人はある。
土港亭秘訣に依る。諸文の解釈書による。
卦。金木土水の算木による。大抵やって貰る。
火

十四日の夜の五穀を鍋に入れてたく。入れるのは神
様かよくつく。粒をその算木の目を抽(五)と
する。

穀粒を一つぶを蒸の水の中に入れて浮んだ
沈み方を見てトんふ。沈むのはよくない様を
出す。十四日にやる。

十四日
十五日 休

十五日(ホンム)には何もせぬ。
立春・建数防ぬはない。旧暦にたくさん接待
はあった。一統のサンプリ巫女は又は神事んミンタイ
たのむ。

十六日の鬼神日は無い。さからない。
巫女は今居ない。四十一年前になくなった。
中の神事は居る。陰陽士は居ない。
神事は巫的
巫的百への

サんづりには亜は宇ないか神様がやる。
亜ころらが分る人がある。

迎蔵

松明（十五日迎へ）行る。松といふは竹しくて出来ぬ。
炬松は四十年も前んなって。（十五日夜祭）
部落対抗でやる。道具は竹やワに火をつけて
火のついたイヌワで叩き合ふ。勝負はしりぞく
もの負けである。昔は手拭をかぶる髪がやか
小さかった。鉢巻でする。
本郷中に今広くあたる大松あつた。その大松の記念
の迎蔵
踏橋は今でもやる。盛大には盛大であす。この
外徒あいのる。その年の悪厄をおとす。十五日
の夜日本あかめかやる。その日をはじめて見た
人が男の子を孕む。踏橋は男も女も出しやる。
老部出かや。
小仏図は今は無い。前に書いてやった。（今でも
中南部でさかんにやる。）

寺はこの附近にない。遠くにあるが、四日市
に行く。男女共に行く。御札も行く。
昔は御材行かなかった。昔は身も行かぬ。
ここより七里半
の上宮 百戸中一二戸行く。五四十年以前。
七宝山 取鉢にまゐる。不知新寺
国分寺
上 辨南宇の寺 洞の白鹿寺。

節乃の時ば何もない。

## 二月

仕事は四月始まる、
二月はさびしい。仕事はない。
二月ん寄合か有れは御祭はしめをやり世帯ん
寄り。戸主青年改選。畑ん土ーの仕度しにかかり。
一村ん寄合は三月。
寄合の時。（十日頃）は家屋修繕。自宅でやる。
縄以、縄り等を作る。創金忙し。肥料の運搬
等あらい芋出し。
下雲面にカチ戸は石隅洞、成張洞、明川洞
下坪洞に居る。二三戸は昔から西洞にあった。
互会は西面以西面洞に昔からあった（形一里位）

行る
清明と寒食は同日又は一日違い。
清明寒食を過して祖先と墓詣り、墓の修
理をやる。
寒食として古風として火をたかぬ飯を食はぬ
かあったが今はそんな事はしない。今子孫の古す
による。ヒヤ飯食はぬのは古る年寄のみ。
二月中に休みの日は清明寒食丈。郡族行
事はない。
十月一日に毛公の節日。二月一日に休みする
はない。主人が休む日には下女も休む。
鼓をつくの日には郡儀として休む事もある丈。行事は
ない。出かけ無稼ぎはする日。

釈典のこと。
春秋二回、二月と八月。（今は四十）
参拝学生百五十名、其の出席者は数ある名。
御校財産は六万四千坪もある。
毎年二千円位の物のかある。春の釈典費は
道でさめる。今年は春秋二回で九千円。それ
で釈典費んは回らぬ。茶館分等が学校
して盛大に行なわれ、自分は不満とする。
儒道の方で講演会もやる。父の保管は郡がやる。
自分達は九十円以外は知らぬ。
春秋の釈典費は実際は二回で七八百円。最
少限で各々は千円以上。意外にも牛や豚も
移して。その多くは牛も移した豚一孔で
二百円で三百円位。
飲福は物品を供えてやる。宋の孔子も中設。
儒教は郡内各地方に治る。分けてある。ある人
は本や私人の家に治る。郡守か郡数か。
亜献は一番の人物、終献は人物又は其の人。
今日では年の十時頃。
初一月前に儒生の各々の選挙の名録がある。
被選者は七献官と都執神、典司官、大祝人
である。以上四十八名位。
学籍は十名（各々百一人）三年。
直員は任期なし。
毎月の直員又は校官がやる。焚香式
毎月一日十五日。
春の釈典毎に儒林道会組合がある

當選の選者は三年毎の一月に各部において選出
する。各部十名宛選出す。即ち各部において
約五十名の選者を選定して互に選挙す
六十名乃至七十名。
即内の俳句班は二三十名。
那花の俳壇には俳道淺学をさそんで人の子。
淺学の如き者は入らぬ人は入らぬ。入らうとしても入れ
もせぬ。宗派による。両班が採用す。両班で
選者は入らぬ。
即内俳句の両班で淺学の如き者は二三十名
他は宗派で入るのみ。
外は常日から有心流の者を成す。大日本
者はよき者を出す。
十五日俳壇者の俳句。
秋も陰暦俳句が事。俳句俳誌
俳壇のこと、たまたま俳句はあるがなる。大部
分はまだ新人である。俳壇のこと、即ち宗の俳道
するなる。新党のものの。新人なって行かうの道。

道路修理は正月（新）と十月（新）に

一反耕
地積は八畝から（千坪）
で麦一石五斗（撮く家の
もの 耕作つけば四斗んある。

一反（ハンヂム）
八畝かり
百坪は一畝とする。
麦に大豆の間作をやる。
大豆が一八んかりで二石五斗、

（野菜作り）
収穫は大分ある
全部で十二五斤出る
ニンニクを作る
野菜を売ることもある（十斤以上(?)）
こともある。
野菜作りの人は江戸(?)。
昔から野菜の盛んな所
があるん。明川郡下
にうる。ニンニク百
草の適地はここであ
る。その為昔からある。
又あるの収入はとれか
多い。他より倍以上
の収穫がある。
明川洞は二百八十九倍。

旧三月寄節句の頃に
井戸浚へ、共同でやる。
祭りはない。

三月

（旧九月に、収穫の直後）
昨年の秋耕をやったところに少し鍬を入れて麦を
蒔く。三月に雪がふれば毛(?)から始める。
麦の作付けは各戸とも多い。
麦と粟とを一年交替。今年麦なら来年粟。
ここでは皆麦を作る。
各戸平均耕地二丁。田、畑が四分の三、田が1/4
畑中は主として粟と麦。
大豆は麦が発芽すると播種する。
三月末四月上旬にかけて苗代の準備、苗床
の前に消え(?)る。
三月は播きがいそがしい。
一八んかりの麦の播種に手の取れやんよ(?)
かかる。二日位かかる。各人二斤（六八んかり）で始
（にたちる苗のつくるのに）
十二日かかる。
大豆の播種は一八んかり二日かかる。
苗代をつくるのには千坪に二三日。今でも共同
苗代でなく、各戸でやる。各戸でやる。
春は寒いから四月頃になってから。

祈年
行事。
三月三日は何もせぬ。祀年もせぬ。
上巳日とは名も何もせぬ。
苗代を作る時に神を祀ることなし。
花祭りは、はやらぬ。多忙故。
三月三日 新子のことなし。

数老人も来ない。数老人は十二日。
三月中にはなん作って置かねばならない。
寝今年は五もち餅を各戸へ作る。私なぞは
勤行く。各戸へやっておいて来字んは算数こぬ。

四月

やす日は麦と菜の除草、豆の除草、加肥。
肥料は比較的要しない。肥料は自宅の堆肥、灰、人糞尿を用ひる。数
各戸の蔬菜は半坪内外。
春中野菜は山菜を多く用ひ特に多いのはわらび。

行事

パリン(八日)ー仏誕生の日をさうよぶ。前は相当盛であったが十年前頃から今はひっそりとしてゐる。男も女も寺へ詣る。寺へ行かねば何もせぬ。
(四月八日の花祭の日手帳に記す)
お寺では御仏の行事をする。仏像の沐浴。
それを色あります。お寺では
自分の祈祷をする。米をもって行って供へる。他人々に説教する侍か。
で祈つてもらつて帰る。世話する宗
る男女が説教を聞いて帰る。
祈りの祈りをせかやる。七星閣はここでは無い。
祈りのおばんは寺にせか行く人もたまにはある
祈りの為の石に祈ることはない。庄屋んちのむすよ
嫁か。
前はパリンに花祭の餅などあったが今はない。
パリンの日は休み。子供はまた休まぬが
お寺で燈をあげる。弟子を配る。(開城か
本物)お寺参りはとまりがけで行く。
経後七日。

---

以上の諸地方には女もくるし、又そちらの女もやる。
寺池んも若干ある。
即ちては殆どない。国会の人か少しあるよ。

⓪

竹ゝ邑 芝村 近州 貞玄氏
中西面 就安里 楊州 金氏
成川郡 雲泉面 柳洞 韓氏
同面 大坪里 密陽 朴氏
同面 了洞里 — 驪興 尹氏

平安郡 東楼面 一帶にある 延安 車氏
同面 白石 文河 金氏
同面 一作いなり — 金氏
海蘇面 内往里 — 宋氏
仙府東楼面 重往里 — 申氏
検山面 検山里 — 崔氏
安州郡 安州面 松城 順興 安氏
同面 老海面 芳苑 — 朴氏
安州郡 蓮洞 — 李氏
其他 黄州郡(全江)にも住する。
鳳沖面 鳳塘里 洪 高氏
江東郡 ... 坪面の尹氏
江東郡 高泉面 ... 里の昌原黄氏

---

寺人は泊り宿をする。
檀家が寺の客の出産の宿を契約してある。
其の他の家に泊り。今は其の家に居る者が
たくさんいる。
寺には一二名位しか居(檀家たちの)が居る。
数はそれから。今は殆ど檀家はない。此処には
聞こえない。
行は寺の財産があるかー寺の敷をする相談して
し米を蓄ふ。それは私を知らない。それは檀家法
檀家をなかせく。

2、

共同作業班

部落の事はんと附近と云ふ。（附近＝プクン）

北門など一つの部落である。

地形的んで了る。

明山洞

| | |
|---|---|
| 北門洞 | 三十七八戸 |
| 東門洞 | 五十三戸 |
| 水辺洞 | 三十八戸 |
| 鷺橋洞 | 四十戸 |
| 三山洞 | 三十八戸 |
| 瓦山洞 | 三十六戸 |
| 校岩洞 | 三十八戸 |

附近（鳴山附近）が
ある。
部落近くに部落が集住。

明山洞は七部落より成る。

洞＝附近

明山部落はこの通りである

---

五月

田植が初まる。　田植のあとの世話をなし。

畑の除草。
春の除草、刈はじめ。

田植の時に祭は今無い。

田植んはフレはない。若からない。たまにプマシは
あるがあまりない。共同にも今はプマシなし。
広人夫を雇ふ。今は賃銀一日五円。三食
食はして。洞内の人も雇ふが、なければよそから雇ふ。
近きの〔困人〕を雇ふかよ。一寸手のない
他洞　陣洞又は洞内から雇ふ。
大人をやとう。

郷結（ヒャンド）（兵役労力奉仕）は四季の時にやる。

病人で困って居る人のは、募集が会をして庶民
を率ゐて薬降作をやってやる。之れを
附近（プグン）と云ふ。今でもやる。家の新築の時
などにも附近をやる。四五名でやる。組合も
ある。十才以下の死人の時も附近プワッシでやる。
葬の時はヒャントはやらぬ。

家の建築、病人ある時、何か困る時やる。
岩父大部落の時は募集が争いし、公共が
宗族が指揮する。附近は同族とは限
らないが、近くに居れば同族、

一、三神なし。
一、子をもつてゐん七星祈禱をする人もある。
太の外に代印なし。
一族全体でおう族中に
契
契田とは契員に通知した人に祖をやる田
契人は若い人が金を出し合って土地を買ひ、それで契員に通知した人にやる。契係
同族の中でやる。
ある門中には一人それに対する勧めある
ところもある。門契の一種として、である。

この姓の通婚相手は大体、仁川、成川、安川
平壌の各郡以外。
仁川郡 中南面 鶴岩里 広州李氏。
同 西面 唐峴里 延安玄氏
同 面 青龍里 延安金氏
同 面 七松里 七松里 広州李氏

[illegible] ①

主婦一年には、四、五、六の三ヶ月休む。
四日か五日に墓を祭るを墓祭と行ふ。
五日は端午の遊び。
男は脚戯（アシスモウ）、又はまた弓術を行ふ。
女はブランコをやる。
脚戯は各地人でやる。とこかの中で部落は
やる。子供等は江山、生物人も男老若男女
皆見物する。勝った者は、賞品をもらって行く。
五人技がある、ルールは手段で
きめる。彼らの間の（市民会）
女性達は他の人相を買ってやる。賞品は牛、酒
から、官公署からもある。
加川國では、十一ヶ月間（他面のものも来る）
又兵が来る。
脚戯は力の者、村中名を集める。
脚戯大会の会長が出て、主の時に出る。
あからかない。動十時間から五時間まで
若年には毎年やるが、他所に臨時にやる時
もある。変になってから、やらぬ。
女のブランコは両力の女行の[illegible]。
土物人は男と女との両方でブランコとすには
行く。ブランコにも賞品を出す。ブランコは
同じ。陰暦するのは去年である。
忘れて、移動して行く。
露天も[illegible]出来て居る。
余り好しは[illegible]として居る。

家宅神

一、土宮ん（トクン）家を守る神。今もある家もある。麦焼のあかめん餅や菓餅をのせてその上に石のだんごをおきその上をおん盆からのチョンチョり をかぶせる。三月に祀る。地運祭ともいふ。その時家の神は皆祀る。主婦が祀るが、昆布と合せて肴を作る。夜十時頃祀る。今では一郎夜ん一戸あるかないか位。

一、帝釈、財産の神、カメに米を一ぱいのれて時んくさったらとりかへる。その上や様ん俵を毎年みかへる。納屋の中に置いてある。今はやらぬ。今一人しやらぬ。祀りは地運祭の時。皆今はない。信を加へるのは地運祭の時祀る。土宮と同じ。祭物を膳んのせて祀る。

一、チョウワン（竃王）は竈の上に祀る。形はない。地運祭の時に祀る。これもお膳に夕
地運祭の々を土神祭ともいふ。トサともいふ。（土祀）

子等わせ四五六男化出せ。
草わら沼は同じ也。
驚湯作りは四月。作らず。兵庫で作る。
一日で出来る。
昨年のは蛇ははなはだ（五六本 松の位置）をとのれ
大鏡をつく。
宗で報告はなし。

殊に今年は田植の最中である。

十二月

藁細工、叺縄、農具の修理、
十二月[illegible]を臘月と云ふ。[illegible]は春へ、豚を殺して[illegible]。豚油を薄用として保存する。
雪隣の水を保存する。夏まで薄用んする。
平野部の 沿岸地帯では一年中の水を蓄へる。夜の[illegible]。
大晦日には寝ない。左から[illegible]の縄を右へ、家のカンにつけておく、鬼をのぞくと云ふ。
大晦日の夜、新しい食物は食へない。正月準備の餅を食べ、歳暮を贈る。自分の帳簿のある家へやる。その翌夜[illegible]ともする。

六月

麦の収穫、田の除草(六月一七日)二回 三回乃至四回
四回行ふ。二回かゝる。
藺取り。(若菜は取れなかった)。明治四十
二十年迄する。
麦の収穫は六月中旬すぐ脱穀、秋の
菜畑の播種。
一八九から(?)の麦の収穫は一日。
中は皆で(?)一日位して了ふ。
上旬田草取り 中旬麦の収穫 下旬田草取り。

十五日の除乳(?)には何もせぬ。祝宴もせぬ。
山神祭りもない。
休もやらぬ。大も食はぬ。酒もなし。
休の時に餅を食ふ家もある。
六月は休もない。

七月

水田と草の除草が上旬に、下旬まで。
中旬から新代り、八月上旬まで。
堆肥の草代り。乾草製造が七八月
新代り各戸自由の時。八月過ぎれば新代
りは出来ぬ。
八月に入ると孩草をしかけておいての作本
かくする。草をついだ草の下刈をやるから。
山をまつるのは冬。

山神祭は七夕の日か其の前の日にやる。祭
りは大体川原の所と同じ。
男も女も行く。女は肉ばかり行く。饒福は
山で［抹消］まつるのは公印が集まって食べる。
肉は生で煮たもの半分づつ、各々家に分け
てさげる。
其れを其の前で各戸に分けてやる。
其十二月山で饒福する。大部分は持って帰る。
其の日には酒をおさめして居る。酒も多くは
用らぬ。おみきを少なくするのを親戚に振舞です。
山での肉の内の肉は喰ふ。
至誠の一日休み。若年の夏もやった。
此辺の者もやった。
年寄の中に至誠はある。
七夕の行事はれんはない。飾り物もない。
白中は仕りない。寺でも何もない。
白中帰りもない。

十一月

十月

十月一杯

紫稲の運搬、稲の収穫、借出。

籾の借出十月中ん頃。麦播は十一月一杯

棉は九月中下より十月上旬んから棉の借出。

清掃。立冬家族んや。

行事なし。

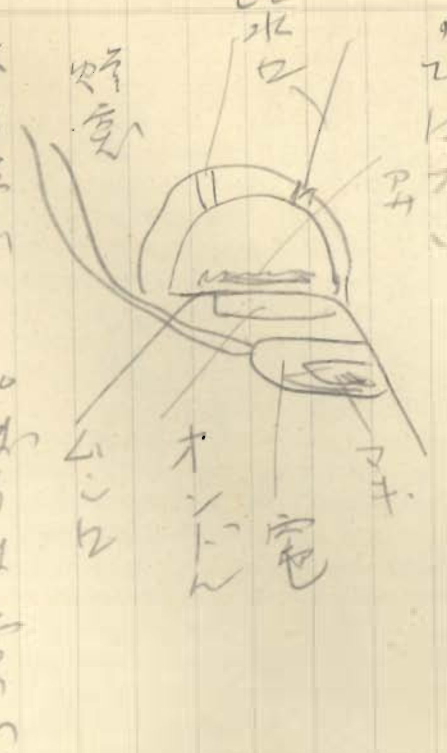
泥鰌突落へ。

麻をかつていおすけは印布春日でむしほを

はぐ。干かして来んて それが七月の仕事。

昔田でむすけは菜お安くかゝる。会つむす

。これはない。




麻は仕出す。これらは春の山ま なおにつむく。

除草のあと過等は方へ 晩かなへ。

もとは八月に
秋豊かな所。

円山の範囲は全部で百か円今ん寺等するくらいの百石、カイ七郎の四方志住である。総計百二三十石。時々の家の者と出て経営した。以前は牛豚を飼った。そのあとて今かある。円さんの家にやる。円さんは最高級品の一番一四の牛肉を作り、和のは高い程売から。九月九日勤出荷して養れ行く二十何んかたまって行く。牛舎ん仏所牛舎ん一千何所である。

# 八月

上旬は新代の仕事
秋分れより収穫が始まる。粟米（モロコシ）
大豆、の収穫である。

大豆は九月初めより。粟は中下旬、風の為早く収穫をすます。稲は下旬より九月上旬迄、大豆が九月中旬以後で、稲米のかへ小豆は八月下旬。すなく。秋高の収穫。モロコシは八月下旬。八月は非常に多忙。一年中一番多忙は八月と三四月です。

鮎の落ち
宋経を印行く。

秋夕、甚多をやる。一日休業。非常ん（木こ）多忙の人は遠出はぬ。この時に秋夕の事をやる。このときは忍はぬかその家の子をやる。つろンっ角力はやつかし十年の時の相ん昇の肉的にはやぬ。非常に馳走を作り、三ん位して部落内で角力とつろンつ。餅を作り、牛豚も殺す。部落で一説って是れを全戸分け合う。多忙である故略かない。是れで統ら過ぎ。

屋人の事

[illegible]

九月

四月、八月の収穫の継続、脱穀する時である。
その他の仕事は無い。非常に忙しい。
九月末頃から。
九月（彼岸）秋祭りも無い。秋社日もない。
収穫祭は無い。それ以外も無い。
（霜降の上にも午をおんつけてさす）十月
の行事である
九月は未だ非常に多忙

運搬

時宜は九日か十九日にやる。門中でも
やる。位土のある墓もある。
他地へ行っている者は帰って来る。
彼岸の事は九日とよぶ。墓参を九日
十九日を両九日とよぶ。
カズは両九日に行う。

九月 上旬より下旬まで

小麦の播種、高粱の収穫、大豆の収穫。
収穫物の運搬、脱穀は了る迄は九月
中より十月上旬にかけて行はれる
豆の収穫をやる。高粱大豆の脱穀は十下—
十一中旬まで、十一月が一番盛んである。
秋耕はして好い。忙しいから [illegible]
する。

時雨 城隍祭 (秋曲)

此一同族で一番(行事の長)年長の人から五代で上るから
十七代の祖の内八つの墓を祀る。
十七代とは行事の一番代から
時雨には宗家は同行する。遷(移)は行事の
人は集って廻り、宗家に仕する [illegible]。

十月十日 [illegible]

時雨

---

十月 上旬より

栗、里芋、大豆の脱穀が始まる十一月
一ぱいまで。大豆が一番おくれる。
[illegible]
時雨はこゝでは余りやらぬ。四月一日
に檀那寺(上山神寺)をやり、檀那の
墓をつくりする。休まぬ。女房どもや
餅を作る。餅はつくらぬ。[illegible]
時雨は昔から [illegible] やらぬ。
[illegible]
で、一般は [illegible]
[illegible]

時雨

里芋の収穫

十月下旬白菜漬
廿粉。

[illegible]

燃料は十年前迄は山へ行つて木を切つて来た。今は燃料に困る。

十二月は雪、
雨は五月中旬より七月上旬
土地結凍は十二月上旬より二月末まで
風は春先三月

十月
思ふは十月のつゞき。
十一月十二月かけ薪運搬（十一月より一月上旬）
他ん作業は無し。
縄やむしろ作らぬ。
正月の飾物を作る。かご をつくる
大きなものやらぬ。休日とする。

八月
堆肥の草刈、飼草の草刈
栗の収穫。稲 ~~麦~~ の収穫も下旬より。
下旬は大豆の播種、
柿の収穫、
蕎麦は二ては ます。

秋夕 大作を合して居る。祖先、五代迄の墓参、十四日十五日は夕方 墓の多い人は十四日から始める。一般は十五日。墓参の飯は近くの村を開く。
嫁は外へ行つて餅を作るより肥もよくする。
夕んマゲしやる人は有る。月を賞する子。
月迎へ
祭物や祈りをし。

[illegible]

プマレを紙わよし
ある。

田の草は
一般に三回
するらよきは
四回。

○最九十七八度位、
最高ー六月下旬ー七月末
最寒ー十二月下旬ー一月上旬
○下三十度位

一番好い時
三月と九月
（寒くも熱くもなし）

十二月
稲〆である。代わりにまぬ、薪運搬
穀物の搬出がある。但年は拍手する。
紙すきはない、
土地の凍結は十一月から一定金ない。
上旬
遊戯は盛んなり。
十二月は畑苧は全くない、家に田を
定めて作ったのははなれた、頼み教かるへ。

七月
野菜の播種、大豆畑除草、小麦除草よ
い大播く。玉もろこしを食べはじめる。
堆肥の草取り。乾草の草取り
牛の飼料を毎日そのかの分を取って来ては
松の枯枝をとる（松ダン池の材料）十五日を輪く。
の残り　庵の松葉

七日の
七夕んは何もない。
七月に城隍の祭、従行店の時など。例年の
時と同じい。歪などまです。休みます。
白中、歌をなし。何もなし。休みす
り池芝もある。

好之

甘藷蒔は五月七月二回。

初苗絡土でやる。

井戸は（二尺ぐらい）掘井戸で押上ポンプ。

五十尺か二十尺位掘るか

[六月]

水田除草、畑の中耕、培土、大麦の収穫調製

上旬は麦刈。麦の脱穀、消毒。馬鈴薯の収穫

雑作

六月十五日祇園は何もせず、耕作もせぬ。

伏迎（ポンノリ）は犬を食ふ。三伏に。山に登って集まって

犬を食ふ酒をのんで遊ぶ。五人十人が一組になって

金をあつめて料理して犬を山や川で食って遊ぶか

この時は踊ったり唄ったりする。男丈参加。

各家庭では何もせぬ。他の人は全部休養する。

ふんそ日休日ではない。希望者丈が伏迎をする。

初伏の時は犬の汁の熱い時に食って汗を流せば、五大から汗が出なくなると信ぜられてゐる。

てい

仲物の元値は卸と商の仲買の定めである。□□は
一年に二年、一年半位□□□□。卸物で元値すれば
もうる。その時は売定して売上げ。場所は卸物より（[illegible]）
ゴ山（こっお山）定める。□□□□。商の元値の時は元し
時にん定まする。一言せず。作者の算法に
最近は商ではやらず、卸の元値（卸定）で合同で、
金融をさせる。それが（昔の）商の元値と同じ。二三年前のように
なくなる。卸でやる。仲介は色（肉）めてやる。今年は
海産物なんかやる。一方の仲は諸年。その時は卸物は
果物。五十近くも算出る。これが地方的な品で行く。
野物は六七も出る。
ブランつは女、商銭は高い取で
十年前は卸落（肉）四五十位迄っていて、楽しみんや～
居たり、十年程は幾年何になる。商又は卸で依んなっ
て居た。以前は女、男も行く。今から三十代位まで
の女しやってるた。多いのは未婚者。昔から女ながら
つと諸年んやめは男ん[illegible]
て居た。
十年前は諸年の同じに同い仲へ、卸売して
ブランつかある。比つしと其比地方で一番出荷する
で行る　経営である。昔は商店も沢山あった。
商物と[illegible]卸店位。又出物し始らなあった。
一番大勝手の時は諸年めこの二つの仕方の時であります。
外宗では和為な卸の地出しあり。

田植丈の休みは何もない。平日より
ぶらり遊びを含めの外。地方により異る。
休日は多少有る。
多忙の月の順、
五、九、四、六、七、
1 2 3 4
一番閑な月、十二月、一月、二月
1 2 3

女の労働、
子ども等は女が田に出る。苗取りは女、
若者は苗取りをせかして居た。今はせん。
それから除地 田の除草も女がせん。
田の畑も男も女。
平常のリューラー、コーサイ両方のみ
男は畑は田、女は畑と云ふのみ若
かしの例他は区別有し者がい

芸風保存班としては未だ出来ず。
三百戸、ブマンを取るのみ。今年は
未定。

五月 田植、畑の除草、麦の播き付け、[illegible]
五月下旬から上旬麦の刈入れ。施肥。
ワレは無い。ブマシは有る。
平安郡、安シゥ郡、郡土軍。新婚の働け
人は色づけ出る。四月より以上あし。
田植の時は若かし人出来来て[illegible] どうしてか今年かくまた一つの[illegible]
近年
子供等、やとう人もあるやとはぬ人もある。
田大名節は丸出し、近年、[illegible]、[illegible]、
え出と近年は[illegible]の[illegible]日と[illegible]
[illegible]と[illegible]は死んだ人の名節、[illegible]年
[illegible]は[illegible]の[illegible]の[illegible]方は[illegible]
早や[illegible]
休日四五人の[illegible]、[illegible]人は四五両日、今は
五日位。
苗落[illegible]は[illegible]
出る[illegible]の[illegible]、[illegible]、[illegible]して一年
[illegible]の葉とする。おキューのモグサにする、せんじて
飲む。よくきく。
[illegible]母草を[illegible]する、子供[illegible]んよし [illegible] よもぎも[illegible]
[illegible]しんよは[illegible]。今も[illegible]
[illegible]は[illegible]、女は[illegible]
(スモウ)

「朝鮮の傳」年中行事くはし。

「山林經濟」年中行事詳細

[illegible]

今村鞆「朝鮮風俗集」年中行事詳し

孫晋泰「朝鮮民譚集」

「朝鮮歲時記」李子有

呉晴著「朝鮮の年中行事」

大正四年一月、五、十月
五年十二月
「朝鮮における年中行事」

「朝鮮」呉晴氏

「[illegible]」川西仁光「朝鮮彙報」大正四年十二月号

「荊楚歲時記」

「歲華紀麗」

「[illegible]録」

「江家次第」（大江匡房）

「公事根源」（一條兼良）

「日本歲時記」

孫晋泰「朝鮮神話遺篇」

楢木末実著「朝鮮の迷信と俗信」

[illegible]「[illegible]」に年中行事詳密。

P.431—
P.432—435 又江家の年中行事の話もあり

---

太陰の[illegible]

四月

一年中の大気の時。[illegible]の時と同期

[illegible]代の[illegible]。田の事を[illegible]し。[illegible]がこれ

から十日目[illegible]の畑を[illegible]かしせねばならぬ。

高粱、[illegible]、大豆、[illegible]。綿。[illegible]。

肥料運搬。[illegible]

四月で[illegible]

四月八日、[illegible]せぬ。[illegible]として[illegible]。

[illegible]をつけ[illegible]を[illegible]。

[illegible]大きな[illegible]のる。[illegible]も[illegible]ぬ。

[illegible]も世の[illegible]はない。

[illegible]の[illegible]に行く。

[illegible]はある。[illegible]に行く。

[illegible]行く人もある。

[illegible]

又[illegible]

[illegible]

[illegible]

四月に[illegible]

もえ舎にてやる。
議文をよむ。一年の豊作と平安なるを[illegible]
新[illegible]。研究の文化かく。
新人会は[illegible]国家のあとを[illegible]抱くかしつて行つて[illegible]る。
れ人[illegible]。今は記念人あるかとうか[illegible]
不[illegible]会[illegible]。れ人新聞の時に[illegible]
比較城[illegible]年は春[illegible]二回又続け[illegible]のあとよ
この去[illegible]。
この会は丹[illegible]番ん[illegible]事[illegible]
部落中に精進する。

トダユ（ここでは土神祭と云ふ）は三月上旬の吉日を
トして各戸で主婦が赤飯を主へ生魚を
買ひ酒を供へ線香を供へ神を祭る。主婦
は夫に知らす。のこりを家族中で祝福する。この時ん
は河原の白砂と赤土をまぜて庭にまく。中庭へ
ある。

城隍祭　三月十五日の吉日（旧三月頃）郷里であ
る。同祭。
祭物は牛豚、酒、米。
祭官は四五日前に執事が選定をあっせん
する。祭官は二人と執事も三人
選ぶのは里方は年輩なから同かあり、年
輩の人が多い。
執事は行われてもよい。
祭式は祭官執事監督する。肉獣を食はず。人の
應仕をさす。夫婦近よらず。當日は沐浴もする。
城隍は大きな木その下に壇を作る。
古い年の祭祀をたてるそこんは人を入れない。古木
あるを神体としては（古木）。ソナンタンナムは古
木の木　神体の木がソナンソナム。大松松の木。
今年の祭は三ん行ってやった。今はやらぬ。
行ったのは
祀らはれ、庭（牟伽罗村内）であんたのでそこん祀る
祭官又御祓して厚了。祭物の分配をうける。
屋各戸人は行く。
餘る物は同家に祭官よかやる。皆は家ん

支那の師の宅へ（万福寺 回）

昭和卯歳三月河原寺ニ於テ
立姫十人登録、
第二回十八姫

三月

各私、墓の修理や草畑の手入（由三月中ん
父印度葉の根を荒く。地肥も拾しきて
畑をご返ににはめる。四月の中にまでつづく。
大まご墓の掃除。
一寸をとりにてや、多忙、絶の始める仕事
にはありまする。

三月五日は時節（九月九日もやる、年二回）
五代以上の墓所である。十年前まではやった。
昔（三四十年前までは）は花崗をやった。
今は上自己の節句はせぬ。家での
記念もせぬ。

松恩一 氏の塔は父印佛林。
御字を登録された人が両親。
二三十年前迄は大印家松恩れるかした。
今は若かしない。今は代の家に存る人士か一存
れ。今は彼方もしない。
佛林整土になってから昔の人は思出した。感情的に（すすなった。）
今の佛林は大切な佛像にならない。
祭祀の家で知らぬ人もある。
この印からは皆は在かせぬ。
昔は此ら書せよう。
今では松恩は在して行っていない。

種をやり。絵添す。芸は[illegible]を聞の。[illegible]
三三礼拝して居る。静しくにやり。老人か我生の中
を色々話しつのもえよ宮女房ーで。此らを眺ては
宮女はすつも[illegible]の男は老若皆行く。寒食と
称名は女も行く。女は依頼しかける丈。時ある丈
は男丈である。
寒食すぎて五六日すぎて[illegible]やかくも大豆を播く。
その時御手足しながら蒔く。
清明の日の何をはなし。
寒食ん冷飯食ふことはせぬ。

五代目の墓は富倉
稲荷の二回、
遷遷もある。（近氏）え人七代
前の墓もあつる。

[三月]

約束は製紙工、阪料集め（牛養豆等を運搬して）
今日は印刷工。鋤は如何な苦学ねはせぬ。
今日は如もやる。以後。
宮倉の畑から知れ也坦坦の修理を始める。支度全
墓と大きは五月への往て持ち。
一日は一日休み。行きはないが、よく食いよく遊ぶ子。
子供たちで遊ぶよ。二三家で遊ぶ遊具する子はなし。
鳥が出よう、あんなにして食んでいます。鳥が出てから食へは
年中不吉の鋏刀高尾で殺し鋳り作る。
キミ子はたべぬまへなって下さる。少大へるとは危ない
かゆくなるとさげ下さい。
宮倉部早く家で起床し、お墓に参る。
私の家は本家に行ってまつる。五代目の墓参りする。
祖父母がついてます。
神位はまずまずのは上流の家丈（旧字）家。庭部は
此辺はない。附近の部落に一つある。家、庭は一定
をもて、あるのは此部落で五六戸ある。外の家のみ
家庭他に用いず。6本の神位あるは内元戸に柵をお
いて夫妻一組ついに形式切ってある。少し右方の家は皆
そうしてある。その他は紙の牌をその外で飾る。
或は一定のもの時はその家で内戸に飾る。今は内戸で。
この辺は大庭ではない。
その墓の石碑のものは同村生まれ～彩色。高い方から
紀元は新しい。大体一百年ぐらいつまります。
一般今んなく墓参者は、それ迄をすませて（後）

たる夜なる。
三月、九月
七月に何時から
名所にも城隍なる。ソナシ
降臨神として円峰を祀よつ
山村の鴫んは

あれは、雲粒、半ばあられはされなよくもまると
たるる何がまちる。一二粒は何かある
立春のねんはよい安気よく書つて大門を捉まで
にはる。今はやらず。十年前れまくやつて
今しかしたる。両年の上手な人んたのお。
文句は書かつてよく詩人の詩句らしい。
知らん紙ではない。

己月上亥の日は根切虫の日である。キビから
を焼く。根切虫を焼き殺す日である

四月上子の日は鼠の日。豆(大豆)を炒って食ふ。
此日女は針を用ひず。鼠の歯がものを
かぢると針めでものをさすのもよく似て
居るからである。

てくる。十五日の一日れ。おんいをてよってはない。
十五日誕生の祭り。芋餅を供へる。十五日午[illegible]
あそ。宮んしめやる。白衣やって行く本家クン[illegible]
に行く。誕生気の付けっても行く。[illegible]の又は
又つ本家又三の本家に纏ん行く。本家の人は[illegible]
給治大本家は本んに行く。大本家では紹介に全体ぬ
供は雑ね工事る。又こて給紹は有る。田ええの前にも
大佐ん第一事[illegible]。[illegible]秋の三日を祝
[illegible]をして一[illegible]。[illegible]
[illegible]
桐をかやる。子婦はやらぬ。
陸所(因遊)紙ずまう(?)をやる。男の紙飾をかざりや
十三日月(回)へ女がやる。月を出たたえが男のことを
まぬ。十五日なんたこをあげる。一年の厄除の文字を書い
てあげる。夕つのすくで紙を付けて上げる。
厄除いんする。男の子があま二百付ける。
十五日の夕食の餅はオブンキ(蓮大会)をやる。水神
祭り。紙白分の数子を書いて、餅を多数のお供のかけ
のものとフンミ、川の深の中に投げる。
豊凶の占い。十四日歳行ふ二幡す。
キビカラの中に十二位の豆をはさみ一晩中泊沸の由
につけ、翌日その多くふくらみ方を比て、ふくらめはその
月は雨なる。多雨では田などよくなる。畑作は
雨なくてもよい。主人が作る。
灰をあげてあるい中ちとして、男んの中へ十四日
の日高かえるつるす。その中に水で左右の[illegible]んよく
ふとも。十五日に見る。豊凶のつぶが入れて

○女の子生れる。

[illegible]

[illegible]

川越郡仏習[illegible]

正月

元日から十五日迄の事[illegible]。今は

今は元日と十五日のみ[illegible]

[illegible]。

十五日[illegible]

二月二日[illegible]三日中[illegible]。

元日[illegible]

[illegible]

十五日[illegible]

二十日[illegible]

[illegible]は五十[illegible]。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十四日[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十四日の[illegible]